

令和3年3月31日

研究開発完了報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

住所 島根県松江市殿町1番地  
管理機関名 島根県教育委員会  
代表者名 教育長 新田 英夫

令和2年度地域との協働による高等学校教育改革推進事業に係る研究開発完了報告書を、下記により提出します。

記

1 事業の実施期間

令和2年5月25日（契約締結日） ～ 令和3年3月31日

2 指定校名・類型

学校名 島根県立隠岐島前高等学校  
学校長名 井筒 秀明  
類型 グローカル型

3 研究開発名

離島発「グローバル人材」を育成するための「地域・社会に開かれたカリキュラム・マネジメント」の探究

4 研究開発概要

これまで本校が実施してきた生徒らがチームで挑む「地域課題解決型探究学習」およびシンガポール海外研修での成果発表は継続して実施する。今回の研究開発では、そういった探究学習のプロセスと各教科をつなぎ、教育内容を相互の関係性で捉える「地域未来探究」を構築する。「地域未来探究」では、探究学習に合わせて各教科で島前地域とシンガポールとの比較研究を行うことなどを想定する。これまでも英語科のパフォーマンステストとシンガポールでの最終発表スライドを連携させるなどしてきたが、これを数学や地歴・公民等の複数教科で展開する。そのために必要なリソースを地域内外の叡智を結集して構築する「地域・社会に開かれたカリキュラム・マネジメント」に挑戦する。

5 学校設定教科・科目の開設，教育課程の特例の活用の有無

- ・学校設定教科・科目 開設している
- ・教育課程の特例の活用 活用している

6 運営指導委員会の体制

氏名	所属・職	備考
藤井 千春 (運営指導委員長)	学校法人早稲田大学 教育・総合科学学術院教授	本構想全般および研究開発全般に係る指導・助言
山下 一也	公立大学法人島根県立大学 学長代行	地域との協働およびカリキュラムに係る指導・助言
市川 力	一般社団法人みつかる・ わかる代表理事	地域に根ざした探究学習のあり方 に係る指導・助言
阿部 裕志	株式会社風と土と 代表 海士町商工会 理事	地域産業との連携に係る指導・助 言
チェルシー ゲイタ	フリーランス (米国出身 ／西ノ島町在住)	隠岐島前三町村連携および国際連 携に係る指導・助言

7 高等学校と地域との協働によるコンソーシアムの体制

機関名	機関の代表者	
島根県教育委員会	教育長	新田 英夫
島根県立隠岐島前高等学校	校長	井筒 秀明
公立大学法人島根県立大学	学長	清原 正義
一般財団法人島前ふるさと魅力化財団	理事長	山内 道雄
隠岐国学習センター	センター長	豊田 庄吾
一般財団法人地域・魅力化プラットフォーム	代表理事	水谷 智之
海士町 (教育委員会)	町長 教育長	大江 和彦 平木 千秋
西ノ島町 (教育委員会)	町長 教育長	升谷 健 扇谷 就二
知夫村 (教育委員会)	村長 教育長	平木 伴佳 渡部 真也

8 カリキュラム開発専門家，海外交流アドバイザー，地域協働学習支援員

分類	氏名	所属・職	雇用形態
海外交流アドバイザー	ジゼル・バーズニー	一般社団法人 島前ふるさと魅力化財団	準職員

9 管理機関の取組・支援実績

(1) 実施日程

実施項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
運営指導委員会						1回						1回
コンソーシアム構築・運営支援				研修①				研修②			研修③	
	教育庁各課横断の伴走											
探究学習推進	担当者設定		研修①	フォロー①	ミニ研修①	ミニ研修②	フォロー②	中間発表会	ミニ研修③	フォロー③	発表会	研修②
	探究指導主事の伴走											
コーディネーター研修							① 研修 ② 研修	③ 研修	④ 研修		⑤ 研修	
高校魅力化評価システムによる調査・検証			研修	調査	バック フィード		研修 活用					
	各校の検証、県担当者の伴走											
ICT 機器整備			研修①	研修②								
	機器・回線整備			順次運用								
人員配置												配置決定
	予算要求											

(2) 実績の説明

①運営指導委員会の開催・授業や発表会への参加等

業務項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
運営指導委員会の実施						1回						1回
伴走者フォーラムへの参加									1回			
成果発表会への参加・助言												1回
事業の広報										1回		

②体制支援・活動支援

コンソーシアム構築・運営支援	4箇所先の先導モデルの知見を他のコンソーシアムの設置や運営に活用。効果的な構築・運営のための年間を通じた伴走を実施。コンソーシアムの運営費、運営マネージャー配置費を支援（県1/2）
探究学習推進	令和2年度から教育庁に探究学習専任指導主事を配置。あわせて探究学習を推進する教員を各校1名設定し研修を実施（必修5回、希望者3回、助言支援随時）。探究学習（地域課題解決型学習）実施に係る経費を支援し、高校生・教員が探究学習の成果を発表する場（「しまね大交流会」、「しまね探究フェスタ」）を設定（今年度はオンライン実施）。その他年間を通じて探究学習の推進について助言等を実施。
魅力化コーディネーター研修	市町村等で配置されている魅力化コーディネーターの研修や、教職員のコーディネート機能の研修を実施。
高校魅力化評価システムの構築と活用研修	「社会に開かれた教育課程」の要素を定量的に把握するため、生徒と地域へのアンケートを実施。検証シートを活用し、学校経営のPDCA構築のための教職員研修を実施。
ICT環境の整備	オンライン授業や会議を可能にする回線、モバイルルーター、パソコンを整備。教員研修を実施し、教育活動への活動を促進。
人員配置	新しい高校づくりに向かう体制構築として、県単独加配の主幹教諭をR2年度は12名配置、R3年度は3名増員。さらに、R3年度は高大連携を推進する職員を3名配置。

③事業終了後の自走を見据えた取組について

- ・「教育魅力化人づくり推進事業」の継続や教育庁の教育魅力化推進チームの伴走体制の強化による学校・コンソーシアムへの支援の継続
- ・令和4年度にはすべての高校にコンソーシアムを設置し、学校運営協議会機能を持たせることを検討
- ・すべての教職員が活用できるようICT環境の整備と研修を実施
- ・探究学習推進担当者を中心とした探究的な学びについての質の向上研修の継続
- ・クラウドファンディングやふるさと納税等を活用した教育活動資金獲得についてモデル校での研究を継続、知見を共有
- ・探究学習や教育課程開発を推進する教職員や教育魅力化コーディネーターの配置、養成・確保・育成
- ・全校でグランドデザインを作成・公表し、「高校魅力化評価システム」等を活用したPDCAサイクルの構築と活用研修の実施

10 研究開発の実績

(1) 実施日程

実施項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
(1) グローカルに課題解決を実践するプロフェッショナルによる授業の実施		5/20	6/10	7/15		9/15	10/6 10/14 10/22	11/12 11/17	12/21	1/26		3/14 3/15 3/20

(2) 国内外の課題解決実践地域との交流事業の実施										1/13	2/2-5	
(3) 地域課題解決型学習と各教科で取り組む「地域未来探究」の実施						9/1	10/6					
						9/10	10/7					
						9/15	10/12	11/12				
						9/16	10/13	11/14				
						9/30	10/14					
							10/21					
							10/22					
							10/26					
(4) 第1回「伴走者フォーラム」の実施									12/12			
									12/17			

## (2) 実績の説明

### (1) グローカルに課題解決を実践するプロフェッショナルによる授業の実施

今年度は下表の通りグローバルに課題解決に挑む講師を招聘して授業を実施した。

授業内の講話はもちろんのこと、講話後には様々な課題解決に取り組む生徒らから個別に質問する機会もいただいた。また、3月に実施した「探究学習成果発表会」には運営指導委員長の藤井先生やゲスト講師としてお越しいただいた市川力氏にもご参加いただき、探究学習に対するフィードバックやコメントをいただいた。

日程	講演者	所属	タイトル
5/20	青山敦士 氏	株式会社海士	海士町の観光におけるホテルリニューアルの意義と価値
6/10	野辺一寛 氏	隠岐ユネスコ世界ジオパーク推進協議会	隠岐観光におけるユネスコ世界ジオパークの意義と価値
7/15	市川力 氏	一般社団法人みつかる＋わかる	フィールドワークのはじめかた
9/15	板脇美代子 氏 福間章仁 氏	町食生活改善推進協議会 町役場・観光定住課	西ノ島の食の魅力と課題
10/6	島根輝美 氏 村尾茂樹 氏	島のほけんしつ蔵 隠岐神社 禰宜	当時の後鳥羽上皇の暮らしとそのストレスについて
10/13	小山瑛司 氏	隠岐デジタルラボ	デジタルを活用した隠岐ならではの仕事とは
10/14	島田由香 氏	ユニリーバジャパン・ホールディングス株式会社	これからの「社会」や「働き方」はどのように変わるのか
	高智康 氏 吾郷均 氏	知夫村役場地域振興課	知夫村の移住促進に関する取組の現状と課題

10/22	小松倫世 氏 宮崎雅也 氏	カフェオーナー みやざきサービス	この島で仕事をつくること
11/10	草苺良和 氏 渡部貴志 氏	西ノ島町役場環境整備課	健康な生活を支える行政の仕事とは
11/12	川本息生 氏 坂本真衣 氏 宇野貴恵 氏	JA 隠岐どうぜん知夫支店 知夫小中学校栄養教諭 民宿但馬屋女将	島前地域の食の地産地消について
11/17	吉元操 氏 濱中香理 氏	海士町副町長 役場人づくり特命担当課	海士町の新型コロナウイルス感染症拡大防止対策の現状と課題
12/21	三浦大紀 氏	島根県浜田市議会議員	地域に貢献するとはどういうことか
1/26	井尻晃 氏	知夫村役場産業振興課	知夫村のゴミ処理の課題
3/16	ムラー和代 氏	海士町教育委員会	海士町での子育て支援
3/18	坂野晶 氏	一般社団法人ゼロ・ウェ イスト・ジャパン	ごみ処理の課題と展望

## (2) 国内外の課題解決実践地域との交流事業の実施

本来であれば、シンガポールやブータン、ロシア、ミクロネシアとグローバルに触れ、その上でローカルとの比較をするなど、グローバルに往還することが本類型へのひとつの挑戦であったが、新型コロナウイルス感染症拡大に伴い、大幅に計画を変更せざるを得ず、予定していた活動を行うことはできなかった。

2 学年が全員で行くシンガポール海外研修の代替として、大分県の立命館アジア太平洋大学を訪問する案も検討したが、緊急事態宣言下での移動を回避すべく、隠岐島前三町村内でグローバルに触れるプログラムと変更した。グローバルとローカルを物理的な越境なくどのように越境体験を持つのかは新たな挑戦となった。プログラム内容やスケジュールは下記の通りで、結果的には、普段居住しながらもなかなか探究しきれない隠岐島前ローカルにどっぷり浸りつつ、一方でグローバルを体感することで、シンガポールに行った時と同じような「越境体験」を構築することができた。

日程	ねらい	活動
2/2	アイスブレイク  研修旅行の目的を踏まえた 4 日間過ごす上での、問い を持ち、仮説を立てる	<午前：アイスブレイク> (1) 身体を動かす (2) チームの協働性を高める昼食づくり  <午後：導入プログラム> (1) 全体オリエンテーション (2) レゴワークショップ 「自分らしさ」とは？、「いい学年」とは？ 「島前地域らしさ」とは？

2/3	グローバルの視点から、これまでの探究活動や自分自身を見つめ直す	<p>&lt;午前：英語プレゼンテーション&gt;</p> <p>(1) オンラインコメンテーター</p> <p>シンガポール国立大学の外国人学生 10 名 立命館アジア太平洋大学の外国人留学生 20 名 島根大学の外国人留学生 5 名</p> <p>(2) 対面コメンテーター</p> <p>島内在住の ALT 5 名</p> <p>&lt;午後：ゲスト講演会&gt;</p> <p>(1) オンライン</p> <p>岡田武史 氏（元サッカー日本代表監督） 岩澤美保 氏（Google 合同会社マネージャー） 税所篤快 氏（NPO 法人 e-Education 創業者）</p>
2/4	隠岐島前ローカルの魅力を再発見し、五感で味わう	<p>&lt;終日：体験プログラム&gt;</p> <p>(1) 神楽（知夫村）：歴史を知る、観る、体験、披露する</p> <p>(2) 燻製（海士町）：ふくぎ茶を燻す、味わう</p> <p>(3) 海の幸（西ノ島町）：捌く、食す</p>
2/5	振り返り、まとめ、今後につなげる	<p>&lt;午前：振り返り&gt;</p> <p>(1) 4 日間で印象に残った体験・シーンを振り返る</p> <p>(2) 初日に作成したレゴをもとに気づきや、変化を振り返る</p> <p>(3) 探究活動全体をチームで振り返り、互いにフィードバックし合い、活動を締めくくる。</p>

次年度は引き続き海外渡航できないことを前提に、オンラインや国内移動のみでグローバルに越境できるプログラムを構築する予定である。

### (3) 地域課題解決型学習と各教科で取り組む「地域未来探究」の実施

当初の計画通り、カリキュラムマネジメントを担当する主幹教諭を配置し、教員研修も複数回実施した。SGH 以降、今年度の新たな取組としては、「地域未来探究」の枠組みを構築し、複数科目および地元小中学校と連携して実施することができた。

中でも、総合的な探究の時間と各教科横断で実施した「地域未来探究」では、古典と保健体育が教科連携し「後鳥羽上皇のストレス」を探究する時間を設けることができた。教科連携だけでなく、隠岐神社禰宜や島で働くセラピストを交え、当時と現在のストレスのあり方の変化についても学ぶ機会とした。生徒たちは後鳥羽上皇の和歌に触れるだけでなく、そこから透けて見えるストレスを見出し発表するなど、教員チームも手応えを得た。地元の小中学校と連携して試行した「地域未来探究」では、知夫村の中学校に本校生徒が複数回訪問し、中学生の「総合的な学習の時間」にメンターとして伴走した。高校生たちは自らの探究活動での経験を活かしアドバイスするだけでなく、中学生から学ぶシーンもいくつかあり、こちらも次年度に向けての手応えを得た。

これらの教科連携・教科横断にコーディネーターや地域の方々にも入っていただき、研究開発として掲げている「地域に開かれたカリキュラムマネジメント」の試行にも着手する

ことができた。先に挙げた後鳥羽上皇とストレスの事例以外には、保健体育と現代社会の連携による「海士町における新型コロナウイルス感染症対策」という単元を設け、海士町から副町長や担当課長に教室にお越しいただいた。

他にも英語の「和食」の単元と理科の発酵をベースに地元・西ノ島町の食生活改善推進委員と協働し、実際に郷土料理のベースとなる味噌の魅力と消えゆく郷土料理の課題について学ぶ時間を設けることができた。

いずれの事例も、教科書があるわけではなく、教員とコーディネーターの発想と地元とのコネクションから生み出された授業で、何よりも教員チームの探究からスタートするところが（大変ではあったものの）有意義であった。先に挙げた英語と理科の事例でも互いの教科書を見る機会はほとんどなく、総合的な探究の時間が間に入ることの効果を得た。

#### (4) 第1回「伴走者フォーラム」の実施

今年度は「成果の普及」の位置付けで「第1回伴走者フォーラム」を実施した。計画書の通り、成功事例の共有ではなく、「学習者を中心にどのように伴走すべきか」の問いを共有し、参加者で学び合う形式とした。

12月12日はウェビナー形式とし、「コーチのコーチ」と称される元ラグビーU20日本代表監督の中竹竜二氏をゲストに迎え、総勢90名が参加した。中竹氏には伴走の手法、チームのつくりかた、目標の掲げ方など一流のスポーツ選手と現役の経営者としての実践知が混ざり合う場となり、参加者の満足度も高かった。

12月17日は中竹氏のウェビナーを元に約40名が参加し、現場での困りごとやカリキュラムを構築する上での悩み相談など、現場に寄り添うかたちで実施した。本校教員をはじめ日本全国から教育関係者が集い、なかでも東京の大島や広島県の中山間地の教員にも参加いただき、貴重な意見交換の場となった。

また、生徒たちの1年間の学びを普及する場として、「探究学習成果発表会」を3月に実施した。チーム部門では、2年生の探究活動チームから3チームが発表（日本語発表が2チーム、英語発表が1チーム）し、個人部門では、1年生2名が探究学習で学んだことがどのように地域活動に活用できたかなどについて発表があった。また、個人部門に参加した3年生（ブータン出身）は、3年間を通していかにグローバルに学んだか、その上でいま自分の中にある「夢」についての発表があった。講評者として、運営指導委員長を勤めくださっている早稲田大学の藤井千春教授や、同じく運営指導委員でありながら地元企業を経営されている阿部裕志氏、本校の授業改善研修を担ってくださっている岡山大学の宮本浩治准教授、本校学校経営補佐官の水谷智之氏にご出席いただき、生徒たちに質問やコメント、フィードバックなどをいただいた。



## 1 1 目標の進捗状況、成果、評価

初年度の開発計画に掲げた「外部人材の指導・助言を得ながら地域課題解決型探究学習とのつながりを2～3教科で実施し、2年目の全教科展開に向けてPDCAサイクルを回す」については上記の通り概ね達成できたと言える。

一方で、グローバル型で本校が目指していた「グローバルとローカルの往還」については新型コロナウイルス感染症の影響で（オンライン以外で）グローバル要素を取り入れ事業を推進することができなかった。

また、目標設定の到達度としては下記の通りとなった。

		主体性	協働性	探究性	社会性
高校としての	生徒の自己認識	64.6 %	78.0 %	63.1 %	69.0 %
活動指標	行動実績	76.4 %	75.0 %	67.5 %	69.2 %

「生徒の自己認識」については、すべての項目で70%以上となることを目指していたが、協働性では上回ったものの、主体性と探究性では目標に及ばなかった。協働性の個別項目を見てみると、「自分とは異なる意見や価値を尊重することができる(91.8%)」や「相手の意見を丁寧に聞くことができる(91.8%)」で高い数値が出た。探究活動の中で他者の意見に耳を傾けながら異なる意見を尊重するトレーニングをしてきた成果が出たと言える。

数値が70%に到達しなかった主体性や探究性の個別項目を見てみると、「うまくいくか分からないことにも意欲的に取り組む(76.7%)」や「自分にはよいところがある(72.6%)」、「現状を分析し、目的や課題を明らかにすることができる(71.9%)」など目標を超えた項目もあったが、「私は自分自身に満足している(46.6%)」や「目標を設定し、確実に行動することができる(54.8%)」などについては大きな乖離があり、力不足というよりは自分自身への物足りなさが反映されたように見える。

社会性の中でグローバル意識を聞く項目の中でも「地域の課題と世界の課題は関連していると思う(80.1%)」については非常に高く、県内他地域との比較でも+13%以上の差が出たことは（とくに本類型における）成果のひとつと言える。

「生徒の行動実績」については、すべての項目で78%以上となることを目指していたが、すべての項目で上回ることができなかった。とくに探究性については数値が低く出ており、中でも「公式やきをまりを習う時、その根拠を自分で考えたり調べたりした(62.3%)」と課題を残した。その一方で、「先生、保護者以外の地域の大人と、なにげない会話を交わした(84.2%)」や「授業でわからないことを、自分から質問したり、分かる人に聞いた(82.9%)」となっており、他者と関わりながら探究性を深めていくことができる一方で、文献やデータを調査分析したり、問いや仮説を立ててじっくり（一人で）向き合う力に課題があることが明らかになった。

<添付資料>目標設定シート

## 1 2 次年度以降の課題及び改善点

今年度達成することのできなかった「グローバルとローカルの往還」におけるグローバル要素については、次年度以降にも新型コロナウイルス感染症は終息しないことを前提に準備を進めたい。具体的には、仮に海外渡航ができなかったとしても生徒たちが隠岐島前と外を比較探究できるようなプログラムを構築する。

生徒の自己意識および行動実績については数値達成を目指すことはもとより、こうした意識や実績が総合的な探究の時間だけで育まれるものではないことを改めて教職員で共有するところからスタートしたい。問いを立てる、仮説を立てる、根拠を調べるなどはむしろ教科でのトレーニングで上昇することが見込まれるため、総合的な探究の時間と各教科の橋渡しや資質・能力をどのように教科間で育むことができるかなどをより意識しながら、引き続きカリキュラム・マネジメントに注力したい。

**【担当者】**

担当課	島根県教育委員会	T E L	0852-22-6085
氏 名	馬庭 寿美代	F A X	0852-22-6026
職 名	企画幹	e-mail	maniwa-sumiyo@edu.pref.shimane.jp